

ヘアファッションビジネスを追究するヘアスタイルマガジン

PROF. RIKEI 7

2012 JUL
NO.624

www.ribiyo.co.jp

プロフ・リケイ

サロンスタイリッシュ
カッコ良くと、
過ぎしやすいが、
ショートスタイルの要
カナメ



リーディング特集

組合の力と
提案を
サロンに活かす

県理事長に聞く!

第4回



沖縄県理容生活
衛生同業組合 石川幸子 前理事長

4月号から始まった「県理事長に聞く!」。このページでは、組合の県理事長にインタビューし、今、業界、そしてその県が抱えている課題とそれに対する工夫や取り組みなどを具体的に聞いていく。その中からもしかすると、理容業界にとっての今後の展望が見えてくるかもしれない。第4回の今回は、県行政ともタッグを組み、滞りなく全国大会を終えた石川幸子沖縄県前理事長にお話をうかがった。

イベントアップの「成功」

——全国大会が終了して、まだ2カ月ほどです(インタビューは今年2月)。大会当日のことだけではなく、それ以前の助走期間や準備期間なども含めて、たくさんの出来事がまだ石川理事長(当時)の胸に去来しているのではないかと想像します。まず振り返ってみての感想をお聞かせください。

石川——そうですね。全理連、そして大森理事長を筆頭に、理容の九州協議会や沖縄の県行政、県知事、そして何より県の組合員の方々のご協力を得られて、大会を無事に、そして盛大なうちに終了させることができました。喜びとともに、ホッとした気持ちでいっぱいです。ご協力いただいたみなさま方には、本当にありがとうございます。お伝えしたいと思います。

石川さんご自身ではなかなか成功したという言葉は使いにくいかなと思います。第三者から見れば立派に成功した全国大会だったと思います。もちろんそれは競技大会としての側面と、純粹にイベントとしての側面と両面で言

えるかとは思いますが、もしそれを示すデータ等があれば、教えてください。

石川——わかりました。まず明確になっているのは、集客数です。全部で7500人ほどの集客がありました。またタクシーは150台稼働、出店業者は特産品のある沖縄に限定しましたが、食事・おみやげ等で1日に百万単位を売上げたところもあったようです。ようは地元としては潤ったわけで、ひと言「儲けさせていただきました」と感謝してくれる業者が多かったですね。観光をかねて大会見学に訪れていたいただいた業界関係者の方々にも、この場を借りてお礼申し上げます。

復帰記念事業の認定が要因

——このように盛大な大会となった背景には、沖縄県自体をこのイベントに巻き込み、さらにはその復帰記念事業のひとつとして認定を受けたことが要因としてあるのではないかと思いますが、いかがでしょうか。

石川——間違いなくそうだと思います。



全国大会、成功の背景に

ます。復帰記念事業と認められたからこそ、業界から、そして県内から大きな関心が寄せられたんだと思います。沖繩には大企業もなく、やはり観光が主産業です。その中で、わずか4日間ほどの間にあれだけ活性化したわけですから、県も喜んでくれたはずですよ。

沖繩では、今後同じようなイベントが増えるかもしれませんね。どこかの大きな組合や組織とタッグを組み、そのイベントを県事業の一環とするというパターンですね。ある意味、沖繩のひとつのビジネスモデルになっていくかもしれませんね。



競技会場のコンベンションセンター展示場

石川―そうですね。そうですね。――そもそも復帰記念事業に組み入れよつというのには、業界と県行政、どちらからの提案

だったのですか。

石川―発案は、全理連の大森理事長です。大森理事長が、同じ年しかも全国大会は2月で、復帰記念事業は5月と、3カ月しか違わないなら、前倒しでその事業に組み入れてもらおうと、提案してくれました。当初はそんな予定はまったくなかったのです。ただ、本来は大会日程は10月、もしくは11月なのが慣例ですが、あいにく沖繩はその時期、台風の季節。ならばその時期は避けて2月になり、気が付いたらその年は復帰40周年で、記念事業もある。ならば……というのが経緯です。

――業界として県に提案し、それが認定されるまで、どのような流れだったのでしょうか。石川―何度も県庁に足を運び、資料を持参し大会の事情説明をしました。もちろん大森理事長も同行していただくことが多かったですよ。また沖繩にある平和資料記念館に23万羽の折り鶴を大会前日に

展示するという企画を発案したのも大森理事長です。じつはそれでも県から認定を受けるまでに1年もかかったんですよ。というのも、私たちと同じような認可申請が100件もあり、1つひとつを県側は精査、審査する必要があったからです。そのうち、45件が認められたと聞いています。でも時間がかかっただけに、大会当日に知事さんや副知事さんが来場され、これほど大がかりで華やかな大会だとは想像もしていなかった、素晴らしい大会ですねとお褒めの言葉をいただいたときは、うれしかったですね。

3 ヒントとなる 沖繩誘致までの経緯

――復帰事業認定の経緯はわかりました。では、話は前後しますが、そもそも沖繩県に全国大会を誘致なさつたこと、それ自体について理由や経緯、そしてハードルなどがあればお聞かせください。

それが、次に誘致を考えている県理容組合の一助やヒントになるかもしれません。

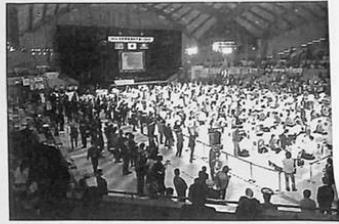
石川―わかりました。私自身は、20年前から大会を誘致したいと密かに思っていました。そしてその間、各地の全国大会とその運営、設備などをじっくりと視察し、参考にしてきました。そしてその長所だけを採用して、いいところ取りを計画してきました（笑）。6年前に理事長に就任してからは、組合員の意識付けにも取り組みました。組合の集まりがあるたびに、「全国大会を誘致するから、その心づもりで」と声を出してきたからです。ことあるごとに、口を酸っぱくして、うるさいと言われるくらい言葉にしてきました。最初はもちろん右から左に流される



開会式であいさつを行なう石川前理事長

県理事長に聞く!

競技会自体も、華やかに行なわれた



こともありましたが、最後はみんなもその気になってくれました。だからこそ、その本気度が認められて誘致が可能になったんだと信じています。

——つまり、言葉に出し続けることで、周囲の意識が変わったわけですね？

石川—そうだと思います。でも気持ちだけではもちろん不十分で、実績も同時進行的に積んできたんです。というのは、沖縄県は組合員が370名前後ですが、こんな小さな組合ではたして全国大会が可能なのかと、自分たち自身も不安に思っていたんです。しかもそもそも全国大会を生で体験した人自体が、ごくわずか。毎年選手が3、4名、役員を入れても最大で6、7名。この20年間で100名いるかないか程度です。ようは、全国大会の経験がなかったわけです。そこで、私は自分の支部、全部で8名ですが、この支部でまずは県大会を実施し、それを成功させました。女性が支部長で、しかも8名。そんな支部にできたのに

自分たちはできないとは口が裂けても言えないでしょう？

——そうやって、持ち回りで県大会を主催したことが小さな成功体験の積み重ねとなっていたのですね。それが経験となり、また自信になったということなんですよ。

石川—そうですね。また他県の信頼を得ることも必要でした。陸続きでない沖縄で、乗り物は？ 移動手段は？ 会場は？ そうした疑問を払拭しなければならなかったのです。幸い、観光が主要産業なので宿泊施設は問題ない。会場も、世界規模のイベントが可能なほどの施設でまかなえる。あとは行き帰りの飛行機の確保、現地の移動手段なども問題ないことをアピールしました。

理容学生が増加する 沖縄の理由

——大会後、大森理事長は見事な運営だったと発言なさっていましたね。

石川—ボランティアを含め、県組合員が頑張ってくれたのはもちろん、全理連職員の方々から大変手厚いサポートがあったからです。

彼らは事前に何度も沖縄まで脚を運び、プログラム作りなど事前の準備と当日の運営上の注意点を事細かに指導してくれました。きっかけとした大会運営のノウハウがあるんだという印象で、大変心強かったですね。

——気になるのは経済的な負担がどれくらいだったのか、ということですね。

石川—おかげさまで、問題ありませんでした。さまざまな方面からご協力があったからです。まず九州協議会、県行政、そして全理連などから助成金をいただきましたし、さらに県からは会場費も免除してもらいました。責任者として、その意味でもホッとしています。

——今回のイベントの結果、沖縄ではヘアサロン業界が多少、活性化したのでしょうか。

石川—ある意味、それは言えると思います。大会当日は、理容はもちろん美容の学生も多数、見学にきてくれました。そもそも、今沖縄は理容の学生が全国でもっとも多い県のひとつなんです。3年前に新設された学校には、1、2年生合計で60名ほど在籍しています。特徴は、その学校は理容

美容単体ではなく、総合専門学校であるところ。他にもさまざまな分野の専門学校がひとつの敷地に集まっているんです。入学式は総勢400名で行なうので、派手で華やからしいですよ。そのせいか、学生もさらさらしていると聞いています。

——では、全国大会開催は抜群のタイミングでしたね。関心が高まっているときに、華やかな大会があり、さらに関心が集まる。相乗効果というか、良循環というか。石川—そうですね。偶然だけど、結果的にそうなってくればうれしいです。

——もしかすると、沖縄の成功事例が全国に広がるかもしれません。いや、そうなってほしいですね。今日はお忙しい中、ありがとうございました。

石川—こちらこそ、ありがとうございました。



終了後、ユライオム会のスタッフ総出で来場者を右見送りしている光景